
ゴッドイーターバースト ～帝王の逆鱗～

リラックマの人間ver.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッドイーターバースト ～帝王の逆鱗～

【Nコード】

N0074Y

【作者名】

リラクマの人間ver.

【あらすじ】

黒いヴァジュラに命を救われた少年。フェンリルの極東支部に保護されて5年たった今、彼は新型ゴッドイーターとしてフェンリルの極東支部の元で働くこととなる。彼がゴッドイーターになる目的はふたつ。一つは父親を殺したという荒神の討伐。もう一つはかつて自分を救った荒神を探して礼を伝える事。彼、未知方ユウマとゴッドイーターバーストのキャラクター達が繰り広げる新たなゴッドイーターの世界。

救われし少年 一人語り（前書き）

初めて執筆します。リラックマの人間ver.です。要するにぐうたらですw

ゴッドイーターバーストを、発売されて一年たった今もやってます。決して上手ではありません。

ゴッドイーターバーストをやってる人にもやってない人にも楽しんでもらえる。物にしたいと思います。

救われし少年 一人語り

「救われし少年 一人語り」

外部居住区に住んでいた俺の家族は幸せと呼べる日常を送っていたんだと思う。

それでも荒神がいる限り、人類に未来はない、そう教えられてきた。「荒神はね、ゴッドイーターという、すごい人たちにしか倒せないの、だからね、荒神はいつかなくなる、でも、すごく時間がかかるの。それまで待つていれるかな？」

幼い頃に母親から聞いた話だ。

元気良くとんと答えたのをまだ覚えてる。

父親がゴッドイーターをしていて、父親の事が誇りだった。

世界で一番強いと信じていた。

でも、そんなある日。

父親がK I A（死亡）になった。

最初は訳がわからなかった。ただ母親がなっていた。

そんな母親をみて、俺も泣いた。そして父親が死んだと聞いて、更に泣いた。

悲しくなつて、只々父親が死んだと認めたくなくつて、フェンリルの極東支部に行ったのをおぼえてる。フロントに泣きながらなぜ父親が死んだのか、どうして死ななければならなかったのか、などと今思えば、愚問である質問ばかりしていた。

そんなとき、なだめる様に抱きかかえてくれた人がいた。

包帯を腕や足に巻いていて、

腕は骨折した様にギブスがはめられていた。

受付の人がその人に、まだ病室で休んでいないとやら傷がぶり返すやらと言われていたが、

「俺はあいつに息子を任されたのだよ。おれにはこいつの質問に答える義務がある。怪我なんて気にしてる場合じゃないんだ。さて、坊主。おまえさんの名前を聞かせてくれ。あいつに聞きそびれたかな。」

この人は、父親と似ている。そう思ったからか、簡単に泣くなという、父親の言いつけを思い出し、必死に涙を止めて答えた。

「ユウマ。…未知方ユウマ。」

「そうか。ユウマ。よく聞け。」

お前の父ちゃんはな、とても強い荒神と、出会ってしまったんだ。恐らく世界で一番強い荒神だ。スサノオっていうんだけどな。…お前の父ちゃんが罔になってくれたから今俺がいるんだ。だから、お前の父ちゃんを殺したのは今お前の目の前にいるこのオヤジだ。俺があいつを守れなかったんだ。…許してくれなんて言わない。だけど、これだけは言わせてくれ。」

俺は父親の性格からして、罔になる事はなんの不思議でもないとかんじた。今まで罔をやってきて生き残ってたからこそ自慢の父親だったのだ。

だから、この目の前にいる満身創痍のオジサンを責める様な事はできる筈もなかった。罔となった父親の仕事は仲間を逃がして、自分が生還する事が仕事。罔が引きつけている間に他の奴らは逃げ切るのが仕事だ。

そう、父親が話していたのを思い出した。

「これだけは言わせてくれ。」

お前の父ちゃんは、最高の男だった。俺が出会った中で一番な。お前は父ちゃんを超える男になれ。あいつの血がながれてるんだ。絶対なれる。」

俺は黙ってうなづいた。そうするとそのオジサンは俺を下ろして言った。

「今日はもう遅いからな、お前さんも帰りな。」

コクンと頷いてからトボトボと言った足取りで帰り始めた。

フェンリルの極東支部から

俺が住んでいるところまでは20分程度だった。

たったそれだけの時間に、事件が起きた。俺が住んでいるd-29地区に荒神が対荒神装甲壁を突破して侵入してきたのだ。勿論俺はそんな事をしない。

帰ったとき、そこにいたのは

ヴァジユラと呼ばれる荒神や集団だった。俺はその化け物達を前に一歩も動けなかった。

ヴァジユラは俺の目の前にきて

爪を立てて、襲いかかる寸前だった。その爪は俺の腹を確実にとらえて引き裂いた。

死んだと思った。目を瞑る間もなかった。薄れていく意識の中その目にうつったのは…黒いヴァジユラが俺とそのヴァジユラの間に立ちふさがったことだった。

その黒いヴァジユラはまるで逃げ惑う人々を守るかの様にヴァジユラ達を倒して行った。

圧倒的だった。

その存在に圧倒されて、俺は意識を閉ざした。怖かった。

夢であって欲しいと思った。

次に目が覚めるときにはどうか、母親が起こしにきてくれと思った。だが、実際に目を覚ますと、

見知らぬ廃墟の中にいた。

痛覚がない事に気がついてヴァジユラの爪が引き裂いた筈の腹を触ってみる。しかし、傷一つない。

「…どうして？」

アレだけの傷があつて、死ななかった事が驚きだ。

自分のおかれている状況がわからずに

「お母さん！お母さん！！」

母親を求めて叫んだ。しかし、母親は現れない。その代わり廃墟の奥から現れた者がいた。

黒いヴァジュラだ。

俺は怖い筈だった。

それなのに、体は全く恐怖をかんじていない。

俺がボーツとしてしていると黒いヴァジュラが俺と寄り添う様に寝た。

この時に俺は、この黒いヴァジュラを味方だと感じた。

父親と似た頼もしさを強く感じた。これは荒神だ。だが、他の荒神とは違う。

人間の味方だ。

グルルル と俺が腹を鳴らすと黒いヴァジュラは用意していたかの様に、グボロ・グボロ

の塊を俺の元へ引きずり出した。どうやら俺の為に食事も用意していたらしい。俺はより一層この黒いヴァジュラになついた。普通だったら食えないような荒神を美味しく食べてしまった。荒神を食べた瞬間、さっきまでの疲労が嘘みたいに回復していった。

…成る程。この様にしてあの深い傷が治ったらしい。

ほかの荒神が俺をおそいにくるとその圧倒的な力と威圧感で荒神を倒していった。

俺はもう一生このままでいいと思っていた。

むしろこのままがいい。

このままでいてくれ。

そんな願いは二ヶ月後に叶わぬものとなった。

朝起きた時にいつもそばに居た

あの荒神がいないのだ。

いつものように食事に出たと思っていたが、夜になっても帰らない。二日たってもかえらない。おれは空腹に耐えきれず、

一人で黒いヴァジユラを探しに出た。しかし、空腹によって、途中で倒れる。

もう、動けない。お腹が空いて力が出ない。

そんなタイミングで目の前にシユウが現れた。足で踏んづけられて身動きが取れない。もうダメだ、そう思った時、シユウがバックにステップを取り、シユウと俺の間に立ちはだかったものがあつた。ゴットイーターだ。

「何たつてこんなところに子供がいるんだ？外部居住区外に住んでいるのか？おい、姉上！」

子供の救護を頼んだ！俺はその間囷になる！」

チェーンソー型のロングブレードを持ったハタチ前後の男が後ろにいる、女に話しかける。

「わかった。あまり無茶をするなよ。」

そう、後ろにいるアサルトを構えた女が叫ぶと

「りょーかい！」

と軽快に叫び

「おら！コツチだ。兄さんが相手したるぜえ。荒神さんよお！」

そう、いつて、俺とは反対方向に走り出す。シユウはその男を追いかけて行った。

その後女が話しかけてきた。

「大丈夫か？怪我はないか？腹をやられているな。待っている、今回復剤を……」

そっぴいかけて女は絶句した。当然だろう。俺もびっくりだ。

今までは荒神を食べたら少しの怪我は直ぐに回復した。だが、今回は荒神を、食えずそして、深い怪我がもう、治りかけていたのだ。

あり得ない、人間でも、ゴッドイーターでも、早すぎる。

「怪我は痛くない。お腹ペコペコ。」

そう、空腹だけを女に訴えた。

「あつ…ああ、そうか。なら、これを食べる。そこらのものよりはうまい筈だ。」

そういつて差し出されたのはレーションだ。

外部居住区に住んでいた頃に食べていたものより美味しいのだろうか？

「…ありがとうございます。食べていい？」

そう俺が聞くと女は微笑んで、頷いた。

「いただきます。」

その一言のあと、俺はそのレーションをむさぼり食べた。

その間にさっきの男が帰ってきた。

「いやあ、びつくりしたわあ。」

デカイ荒神の反応が出たと聞いたからきたのに、来てみたら只の子供じゃないか。最近の調査隊は人間と荒神の区別もつかねえのか？」

そう、呆れたようにいう男を女は注意した。

「こら！リンドウ、あんまり考えずにものを言うな。もう、逃げたのかもしれないだろう。取り合えず、この子供の保護を優先させる。救護隊を要請してくれ。」

そう言われるとリンドウと呼ばれた男はめんどくさそうに無線機を取り出し

「ああ、もしもし。こちら第一部隊所属の雨宮リンドウ曹長。

子供が重傷をおっているところを作戦行動地域で発見。至急救護隊をよこしてくれ。」

といった。

そうしている間女の方からいろいろな質問責めをくらう。

「君はどこに住んでいるのだ？家はどこだ？ここの近くなのか？」

俺は必死に自分の外部居住区の居住区エリアの番号を思い出した。

「d…29。未知方…ユウマ。」
そう言うとオンナは驚いて言った。

「外部居住区に住んでいるのか?!どうやって荒神装甲壁から出たのだ?!いや、未知方…とは、先日スサノオと遭遇して戦死した未知方ゴウキ氏の息子か?既に二ヶ月前のヴァジュラの群れの外部居住区侵入の際に母と共に死亡したと言われたが…。」

女の方が取り乱している、連絡を終えた男が女を嗜んだ。

「おいおい、姉上らしくもない。取り乱して。よかったじゃないか。しんでたと思われる人間が生きていた。逆よりは断然ました。生きていてこそその人生だからな。…それにしても、d地区…か。なあ、姉上?確かあそこらへんは…」

男が気まずそうに話を女にふる。

女も少し罰が悪そうに

「ああ、先の事件で、居住区の家、人、共にほぼ全滅した地区だ。恐らくこの子が外部居住区に帰っても親族などは…」

いない。そう告げられて、俺は絶望感というものを味わった。

そうしている間に俺は到着した救護隊に保護され、しばらくの間、とある人物からの以来で、

フェンリルの極東支部の特別保護区に預けられる事になった。

どうやら、俺は新型ゴッドイーターの素質があるらしく、体の仕組みが荒神だと騒がれた。

そんな事も、既に五年経とうとしていた。

救われし少年 一人語り（後書き）

どうでしょうか？

次からが原作開始です。

勝手にリンドウの位を曹長にしましたが、リンドウって、原作開始の時既に10年もゴッドイーターやってるんですよね。

だから、そのちょうど中間地点の5年たった時にはそれくらいになつてゐるかなーって勝手に思いそうしました。

では、そろそろ次の話しの執筆に、集中しますので、次もよろしく願いします。

その少年らは神喰らいか？

二人漫才（前書き）

皆さんおはこんばんちはなら。
上の挨拶は

おはよう、こんばんわ、こんにちは、さよなら全ての挨拶を含んで
いるのでとても便利です。いつ皆さんがこの小説を見てくれてても
つかえます。

…まあ、だれも見えてくれないと思いますが、なんと！お気に入り
が一件ついてました！

やったあ！ぐうたらもがんばるぜえ！

やっと、第二話が完成しましたあ！

二日に一回の更新を目指そうと思います。

目指すだけなら自由です！

…嘘ですすいませんごめんなさい。

ちゃんとやります。

ゲームも小説も両立します！

その少年らは神喰らいか？

二人漫才

荒神。それは2050年代に突如として現れた「神」の名を冠する人類の天敵。

「オラクル細胞」が地球上の

あらゆる対象を「捕食」しながら急激な変化を遂げたもの。

通常兵器の全く通じないそれは、大部分の都市文明を食らいつくし、短期間の間に崩壊させた。

そして、今。俺の目の前に、

荒神への唯一の対抗手段である、

「神機」がある。

今日この日より、俺はこの神機と共に、ゴッドイーターとなる。

あの日、リンドウとツバキ姐さんに助けられてから、ずっと、

フェンリルの極東支部特別保護区にいた。

榊博士という人の要請で、荒神と二ヶ月共生していた俺を研究対象としてぜひ迎えたいと言ってもらい、食事なども中々にいい物をもらって来たが、先日、俺と適合する新型神機が見つかったらしく、研究対象としての立場は変わらないが、これからは新型ゴッドイーターとしても研究対象となる。

しかし、この博士、研究といっても、5年間ずっとなにをするでもなかったし、やったことと言えば、ちよいとばかり、俺から血を抜いたりしただけ。

それがなにの研究になるというのだろうか？

「それでは、未知方ユウマさん。第一訓練所に入ってください。これより、適合テストをはじめます。」

- - - - -

第一訓練所

そう呼ばれて訓練所に入ると、
神機が大きい機械に横たわるようにして置かれていた。

「長く待たせてすまない。ようこそ。人類最後の砦、フェンリルへ。
いまから、対荒神部隊、ゴッドイーターへの適性試験をはじめる。」

長い間ここにいた俺は、この声の主を知っている。

この人はここ極東支部の支部長である、ヨハネス・フォン・シック
ザール氏だ。

俺はこの人のことを心の中で

「微笑みの奇術師」
と、名付けている。

どのような時でも決してその微笑みを崩さず、自分のペースに持っ
ていくからだ。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい」

この人は、悪い人じゃない。

悪い人じゃないのだが、深く入り込んではいけない、そんな感じが
する人だ。

「心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ」

そう言われてましてもね、
さつき散々してきたから、
いかせてもらいますよ。

そう思い、俺はケースのまえに立った。

そうすると、またさつきの声の主から声をかけられる。

「ふつ。君はいつもそうだ。他の者には無い物を持っている。普通
このような物を目前にしたら、多少なりとも怖気つくものなのだが、
そんな素振りも見せない。ペイラーもいつもそう言っているよ。」

本当に、あの二人は仲がいい。

昔からの腐れ縁、てやつなのかもしれない。

正直、あの変人メガネのマッドサイエンティストこと、榊博士とは
余り関わりたくないと思ってるやつが多いのだけど。

さてと、神機さん。あんたとは、これから嫌でも付き合って行くこ
とになるが、

俺の目的を達成する迄に、

潰れてくれるなよ？

これからの相棒

神機を掴んでいると、上から腕輪の上部のついたケースの蓋が勢い
よく落ちて来て、俺が腕を添えている腕輪の下部とフィットして、
俺は腕を固定される形となる。

と、同時に。閉められたケースの中からクチャクチャと、気味の悪
い音が、俺の腕に痛みを…伴わなかった。

「君には、何故がもう偏食因子P・53を生成する能力が体の中に有るらしくてね、他のゴッドイーターのように定期的に埋め込む必要がないのだよ。」

だから、その腕輪は只の飾りだ。一生はずすことはできないがね。」

おー、それはそれは。恐らくは、「あの」時だろう。

ヴァジュラに襲われて、黒いヴァジュラに救われた時。あの時に傷は何故か治りきってた。

まあ、偏食因子が埋め込まただけでは、説明の付かない速さだったのだが。

にしても、只の飾りの腕輪を一生はずせないとはね。

えらくハードなマゾプレイだ。

そうしてる間に、適性試験が終わったらしい。

「おめでとう。君がこの支部初の、新型ゴッドイーターだ。

適合試験はこれで終了だ。次は適合後の、メディカルチェックが予定されている。始まる迄、その扉の向こうの部屋で待機していてくれたまえ。気分が悪いなどの症状がある場合は、すぐに申し出るように。」

期待しているよ。

未知方ユウマ君。」

- - - - -
- - - - -

エントランス

どこかすわれる場所ないかなあ、と探していると、同じく今日ゴッドイーターになったらしい少年が座っているベンチがあった。ちよいと横失礼してつと。

「ねえ、ガム食べる？」

と、その少年が話しかけてくる。

このご時世だが、俺は結構いい待遇をもらえていたの、ガムは何度か食べたことが有る。どう返事をしようと考えていると、その少年はポケットを弄り、

「あつ、切れてた。今噛んでるので最後だったみたい。ゴメンゴメン。あんたも適合者なの？」

「うん？ああ、そうだ。」

「俺と同じ年が、少し年上っばいけど、一瞬とはいえ、俺の方が先輩ということで、宜しく！」

「それは俗に言う同期というやつだ。」

「細かいことはいいのいいの！」

なんか、話しやすい奴だ。

これからいい関係を気づけそうだなあ等と考えていると、見慣れた人が来た、

「あつ、ツバキ姐さ…」「立て」

…えっ？」

横にいる少年も うん？という顔をしている。

もう一度声をかけようとすると、その前に怒声が聞こえた

「立てと言っている、立たんか！」

ヒュッ！という、音を立てながら横の少年と共に慌てて立ち上がった

た。相変わらずおつかないなあこの人は。

「予定が詰まっているので、簡潔に済ますぞ。私の名前は雨宮 ツバキ。お前たちの教練担当者だ。このあとの予定は、メディカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう。」

なんかごちゃごちゃ言っているが、めんどくさいことだけはわかった。

「今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまり死にたくなければ、私の命令には全て、

Yes で答える。いいな？」

退役してからこの厳しさだけは変わらないのよなあ、この人。

…守る側…か。

俺は一体、なにを守ればいいのだろうか？

「わかったら返事をしろ！」

そう言われると返事をせざるを得なくなりますな。

「はい！」

と元気良く横の少年と一緒に返事をした。そう言えばまだこいつと自己紹介してなかったな。

「早速メディカルチェックを始めるぞ？まずは、お前だ。ユウマ。ペイラー・榊博士のところに15:00迄にいけ。お前はもう此処の施設の内部については嫌という程知っているだろうが、だいたい

のメンバーがお前のことを知らない。挨拶をしとけ。

そして、藤木コウタ。お前は17:00迄に同じく博士の元へいけ。それ迄にこの施設を見回っておけ。今日からお前らが世話になる、フェンリル極東支部、通称【アナグラ】だ。メンバーに挨拶の一つでもしておくように。」

そう言つてツバキ姐さんは区画エレベーターの前にいった。

俺はそれを追いかけてツバキ姐さん呼び止めた。

「ツバキ姐さん！」

そう呼ぶと、ツバキがすこし怒ったように、

「何度も言っているが、ここでは、そう呼ぶな。リンドウのように殴らないとわからないか？」

「

「イエイエ、ボクハヨイコデス」

「ふっ、相変わらずこの脅しがきくな。そうか、あれからもう五年か。あの時に救った少年が、まさか新型神機適合候補者だとは思わなかったよ。できれば、私が現役の時に適合して欲しかったがな。そうすれば、戦場でも厳しく指導ができたのだが。」

「ツバキさんと戦場に出るとか、荒神と戦った方が、怖くない気がするぜ。」

「だが、安心しろ。今や私に変わって第一部隊のリーダーとなった、リンドウがいる。きっちり指導するように言っている。」

…あの人がそうゆなことするようにには思えないのだがなあ

「さあ、早く榊博士のところへいけ。早く行って損することなんてないぞ。」

もうちょっとゆっくりしと来たかったのだがな。
ツバキ姐さんに言われちゃ仕方が無い。
ゆくか。もうさんざん行き慣れたところへ。

- - - - -
- - - - -

榊博士の研究室の前

区画エレベーターでラボラトリーまでいき、突き当たりにある榊博士の研究室の前に、
ピンク髪の女の子がいた。

「あ！新しくきた人ですね！」

声をかけられた。

身長は160あるかないかぐらいだろうか？
にしても、可愛い人だなあ。

「ああ、はい、そうです。」

「これからメディカルチェックですよ？研究室はこの突き当たりにある所です。榊博士は知ってますか？あの人悪い人ではないですけど、少しなんて言うか…」

そこまでいってもらったら大体言いたいことはわかる。

榊博士はとにかく変人なのだ。

「知ってますよ。長いことお世話になってるので。」

ニコッていう感じで、笑いながら答えると、その女の子はキョトンとした顔になり、どうして？という顔になった。

これは、いじめたくなるタイプだぞ。

「因みに、俺はここにきて5年になります。まあ、僕は基本的に余りに会わないので、知らなくても無理はありません。ずっと、保護区に住んでましたから。あっ、時間なので、そろそろ失礼します。」

颯爽としたかんじで立ち去り、

研究室にむかった。

- - - - -
- - - - -

榊博士の研究室

研究室に入ると、榊博士と何故か支部長がいた。

「ふむ…予想よりも726秒も早い。よくきたねえ、新型ゴッドイーター、ユウマ。さてと、見ての通りこっちはもう少し準備で時間がかかりそうだから、ヨハン。君の用事を先に済ませたらどうだい？」

相変わらずの支部長をあだ名呼び。何度、支部長が博士に注意した所を見てきたことか。

「博士。そろそろ公私のけじめをつけていただきたい。
つと、ユウマくん。適性テストでは、ご苦労だった。改めて適合お
めでとう。」

改めて言われる様な事なのかな？そのためだけに来たとは思えない
のだが…

「ユウマも知っていると思うけど、かれも元技術屋なんだよ。君も
新型ゴッドイーターに興味津々なんだよね？」

確かめる様に博士が支部長にいう。

「あなたがいたから、技術屋を廃業したんだ。…自覚したまえ。」

支部長が博士を嗜む様に言う。

やはり、博士は世界的に見てもすごい人なんだろう。

「本当に廃業しちゃったのかい？」

少しからかうかの様に博士がいうと、支部長は意味ありげに微笑ん
だ。

「ふっ、さてと君がこの支部に来た時から、こうなる事が一刻も早
く叶うように「この数値は！」…願っていたが、五年という、歳月
がたってしまった。そうしてる間に、荒神は、もっと強く、さらに
「おお！」…進化を遂げて複雑になった。君には父親を殺されたとい
う私的な感情もあるだろうが、戦いの中ではそのような「すごい
！これが新型か！」…ペイラー！話しの邪魔だ。」

流石に此处まで邪魔されると鬱陶しい。で、何の話してたか忘れ
たのだが。

「あー、ゴメンゴメン。ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだ。」

本当に、妙な事でテンション上がる人だな。この前は五十何年間雨が降らなかった日に雨が降ったやら何やらでテンションを上げていた。本当に、何度もいうが、変人だ。

「あー…何の話しをしていたか忘れたが、ともかく、人類の未来のためだ。尽力してくれ。」

そんなに、仰々しく言われたらプレッシャーかかるなあ。

「それでは、私は失礼するよ。ペイラー、後はよろしく。終わったらデータを送っておいてくれ」

支部長はその言葉を作業中の博士にかけると出ていった。

うーん、出ていきかたも様になってるなあ。

そうこう考えていると準備が出来たようだ

「はい、準備できたよ。そのベッドに横になって。少しの間眠くなると思うが、心配しなくていいよ。次目が覚める時は自分の部屋だ。」

部屋を新しくもらえるのか。

…にしても、博士の前で無防備にしていると、何か変な薬でも投与されないか心配だ。

非常に失礼だとは思うが、この人ならやりかねない。

「戦士のつかの間の休息という奴だね。予定では10800秒だ。」

ゆっくりお休み」

- - - - -

自室

そう言われてベッドに寝ると、
すっ、と眠りに入ったようで、
気がつけば部屋で寝ていた。
此処が俺の新しい部屋なのだろう。

周りをみれば、荷物がダンボールに入って置かれている。
…これからの作業が大変そうだ。

そう考えていると、メールが入っていた。
あの藤木コウタと呼ばれていた少年からだった。

「件名 よろしくな！

本文

ところでさ、俺のメディカルチェックって、いつ始まるか知らない？

確かツバキさんが俺にいった気がするんだけど思い出せないんだよなー。聞きたいけどあの人が怖いし…。」

17:00からだよ馬鹿野郎。と心で思った。今既に18:00だから教えても仕方が無い。
代わりにこう送っておいた。

「件名 ドンマイ

本文

たっぷりツバキ姐さんに怒られろ」

そう送るとすぐに返信が帰ってきた。

「件名　ほっぺ痛い

本文

もう既に……」

面白い奴だ。

そう思い、不覚にも笑った。

その少年らは神喰らいか？

二人漫才（後書き）

さあ、いよいよ原作開始ですが、
すでにツバキや博士が主人公を古くから知ってる設定なのでセリフ
を変えるのが苦労しました。
正直めんど（ry

まあ、次は皆大好き我らがリーダー、リンドウさんが出てきます。
楽しみに待っててねえー

b y 青い猫型ポンコツロボット

第一部隊討伐班リーダー

三つの命令は四つ（前書き）

ついにリンドウさんきたぜー。
やったー。

あと、テストが帰って来たぜ。
ちくしょー。

お金が無いぜー。
ど畜生

…すみません。
どうぞ。読んでくださいますし。

第一部隊討伐班リーダー

三つの命令は四つ

第一訓練所

俺とコウタはツバキ姐さんにみつちりといじめ…

「何をブツクサ言ってるのだ、ユウマ。早くせんか。」

…鍛えられているところだ。

腕立て1000回とか無理すぎるだろ。ゴッドイーターでも、限界はあるんだぞ！そりゃあ、普通の人よりは運動神経やら筋肉やら強くなるけどさ。

「ほら、横にいるコウタなんて、文句も言わずにもくもくとやってるぞ？中々に見込みのある奴なのかもしれん。」

そう言われて横をみると、

コウタは白目を向きながら只々

腕だけを上下させていた。

「コウタ…お前…そんなになるまで…」

しかし、コウタの動きが突然止まった。

「どうした？コウタ？まだ1000回はいってないぞ？」

ツバキ姐さんがそんな非情な言葉をかけると、コウタは糸の切れたマリオネットのようにパタッ、と倒れた。

俺が絶句していると、ツバキ姐さんは気にもしない様子で、

「ユウマ、手が止まってるぞ。ほら。あと100回ほどだ。」

鬼だな。この人は。

俺は最後の力を振り絞り、なんとか終わらせ、

「やっと、…終わった…！」

と、喜びに浸っていると、

後ろからはたまたま非情な言葉をかけられる。

「休んでる暇はないぞ。続いて、腹筋、背筋を各1000かいだ！」

！（――；）

ダメだ。この人にかかれば、

かのドラゴン クエ。トの

大魔王も一撃だろう。

勿論、俺たちの一日はこれで終わった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

自室

俺がベッドの上で昨日の訓練の

疲れを気持ちよく癒していると、そんな安息の時間の終わりを告げるかのように、ツバキ姐さんからの通信が入る。

「はい。こちら第一部隊所属の未知方ユウマ。」

「ユウマか。昨日の疲れが多少残っているとは思うが、今日は、リンドウと初の実地演習だ。7：00にエントランスで待機しておく事。以上だ。…喰われるなよ。」

普通の人間なら一日中休んだって疲れがとれないと思うのだがな、ゴッドイーターでも、半日は爆睡して、それでも疲れは完全には取れないだろう。

俺は、あの日以来、自己再生能力が以上で、それは荒神のそれとほとんど変わらないスピードだ。

だが、人間の自己再生能力には限界がある。いつまでもそれは続かないだろう…

というのが博士の見解だ。

さてと、討伐対象は、

オウガテイル…か。

装備を整えて来ますかな

- - - - -
- - - - -
- - - - -

神機保管庫

ここに来たら、とりあえずあいつに声を掛けとく、というのがここに来てからの習慣だ。

「おっす、リツカ。相変わらずの油まみれか？」

そう、神機保管庫いる、同い年の銀髪がかったツナギ姿の少女にか
らかいの言葉をかける。

「はいはい、悪かったわね、年相応な格好じゃなくて。」

そして、いつものこの返し。
今日も元気なようで何よりだ。

「大丈夫だ。古い言い回しだと、えっと、油の滴るいい女っていうらしいぞ。」

と、ぼけてみると

「水の滴るいい女、ね。そろそろ新しい絡みを考えた方がいいと思うよ。飽きて来たし。」

「おおう、そうかそうか。」

飽きられるのは困る。俺はここに来ての唯一の楽しみである銀髪美少女（年不相応）をいじることを続けていきたいからな。きょうの実地演習が終わるまでに考えとくわ。」

そう言つと、

「あつ、そう。期待して待つとくよ。」

と、軽くあしらわれるようにいつているが、少しだけ顔は笑ってるのを端目に見ながら、

「で、俺の神機は？」

そういつと、おもいだしたように、リツカがいう。

「ああ、君の神機ね。とある人からの依頼でもう既に何本か刀身をそろえてるんだ。」

…そんなお節介を焼いてくれるのはあの人くらいだろう。

「ほんと、ゲンさんもここまでするとはね。『ユウマはあいつの父親を超える男だ』とかいって、自分が今まで保管していた素材の殆どを、持って来たんだよ。」

みると、俺の神機保管スペースに何本かの色とりどりの刀身があった。

「普通は使う刀身と違って、一本に決めるんだけど、どれがいいかわからないから、全属性作つといたよ。」

流石この道5年のベテランさんだ。

にしても、あの黒光りした禍々しい色を放ってる刀身はなんだろうか？

「なあ、リツカ。あれもお前が作ったのか？」

と、その刀身を指差して言う。

「ああ…あれは、ウチの父さんが五年前、君に作った、刀身だよ。きみのお父さんが死んで、ウチの父さんも悲しかったんだよ。そして君が見つかって、新型ゴッドイーターの適合候補者と聞いた途端、作り始めたんだ。もう一心不乱にね。禁断の荒神晶体を用いたあれは、恐らくは今までの刀身の中で一番の業物になったんだけど、その代わり、持つものに悪影響を及ぼしやすいものになっちゃったんだ。そして、それが出来上がった直後だよ。…ウチの父さんが荒神に喰われたのは。だから、これはウチのとうさんの最後の一振り。その名も『呪刀』。仲間への復讐を思う余り、その能力は使用者に悪影響を及ぼす。今の君にはまだまだ使えないと思うよ？」

リツカの父親は俺も知っている。気さくでいいおっちゃんだった。

ウチの父親と仲が良く、そのよしみでリツカともよく会っていた。ウチの父親が死んだと、家族に報告に来たのも、リツカの父親だ。その声は、悲しみと荒神に対する怒りで震えていたのを覚えている。そしてこう言っただ。

「あいつがやられたのは、俺の作った神機が不良品だったからだ。もっと、俺に技術があれば……。あいつも死ぬことはなかったのに……！」

そして、俺がフェンリルの極東支部の特別保護区に移り、適合候補者と判明した時にも、

「父親の二の舞は辞めてくれよ。ウチの娘も悲しむし、お前の父親も、そんな早く天国にお前を迎えに行きたくないだろうしな。……でだ。俺からの餞別として、いい物をやる。いつか、使える日がくると俺は信じている。」

その時に言っただものはこれか。確かに、これ程の業物があれば、あの、スサノオも倒せるかもしれない。あとは、俺がこれを扱えるほどの奴になる。

「だから、今はあれはナシね。他にもいい奴あるから。確かにあれには敵わないけどな。」

そう、悔しそうに笑うと、

氷刀

火刀

雷刀

神鳴チエーンソー

と言った新兵にこれはVIP 待遇過ぎだろ、と思いつながら、氷刀を選び、セットする。

銃身はコンゴウから作られる、金剛大砲。

この銃身を持つものは、刀身での一撃一撃に力が込めやすくなるが、スタミナが持たなくなるらしい。

制御ユニット

バーストモードにしか、効果を発揮しないが、効果は基本的に大きい。

これは、ウォーリアという

バーストモードに

なると、剣撃をとおしやすくなり、自分へのダメージを微量ながら軽減してくれるなかなか便利なもの。これも新兵にやっていいほど安いものではない。

強化パーツ

つねに効果を発揮する、パーツ。絶大な効果を発揮するものがつくものほど、バッドステータスがつきやすい。

これにはびっくりするものが来た。

背水の陣と呼ばれるパーツと

ベルセルクの血脈と呼ばれるパーツだ。

背水の陣はその名の通り、使用者の危機察知して爆発的に火事場能力を発動させる。

全支部でも、俺が始めてつけるんじゃないか？

そして、ベルセルクの血脈。

これは、バーストモード時にしか発揮しないが、剣撃のいりよくが大幅にUPするが、ガードの展開速度が遅くなったり、被ダメージが大幅にUPする。

強力過ぎるが、反動が命に関わるため、だれも使わないのだ。

「そう、こんなパーツつけるなんて死に行くようなものだよ。でも、君のその異様なまでの再生能力があれば、使いこなせる。そう、思ったの。」

だが、こんなもの新兵に与えてもらっていいのか？

「支部長とサカキ博士は快諾してくれたよ。むしろ使わせてやってくれと言われたよ。」

…あの二人か。

大体承諾した理由はわかる。

実験データが欲しいのだろう。

まあ、確かに俺はあの人たちの実験に協力するという条件で、保護区にいたわけだからな。

「初めて見るよ。こんなに充実した装備で実地演習にいった人なんて」

クスリと可愛くリツカが笑う。

やはり普通にしてれば可愛らしい少女だ。

…だが、あの、冷やしカレードリンクを好きだということは許さ

ない。

あんなもの、飲んだ瞬間
ゲロゲーロだったからな。
哀しそうな顔で

「美味しいのに…」

と言われた時にはこいつの味覚はおかしいと昔は思ったものだ。

「んじゃ、実験台になってくるわ」

と、自虐的に言つと

「そついうふうに言わないの！」

お叱りを受けた。これもいつも通りだ。

- - - - -
- - - - -

エントランス

さて、リンドウを待つてゐるわけだが…現在時刻、7:30。

30分経つてゐるぞおい！

あの、野郎も相変わらずだ。

と、憤つてゐると、リンドウが階段を降りて来た。
すると、オペレーターである、ヒバリが

「あっ！リンドウさん。支部長が、見かけたら顔を出すように言つてましたよ。」

と、連絡をする。

しかしリンドウはスルー。

「オーケー。見なかったことにしてくれ。」

…。ダメだこいつ。早くなんとかしないと。少なくとも、助けもなかった時の印象はカッコいい兄さんだったのになあ。
今の俺の中でのリンドウの評価は、

「酒飲みぐうたら女垂らしの残念人間」

だ。

「オイオイ、ユウマ。そりやないだろ。」

「うん？口に出てたか。そりゃ失敬。だが、事実を述べたまでだ。」

「全く…まあいいや。改めて言うまでもないとは思うが、俺の名前は『雨宮 リンドウ』。形式上お前の上官に当たる…がつ、まあ、細かいことは省略する。お前もグダグダ言われたくないだろ？」

ああ。その方が面倒くさくなっていいのだな。

「姐さんにばれても俺は知らないぞ？」

「おー、それは怖い。黙つといてくれや。」

と、馬鹿みたいなやりとりをしていると、久しぶりに会う女性を通った。

「あつ、ユウマ？！ちょっと見ない間に大きくなったわねえ？何年ぶりかしら？」

サクヤさんだ。この人は昔のオペレーター時代から世話を焼いてくれてたのだが

神機使いとなつてからは中々に会う機会がなかったのだ。えーっと、これで半年ぶりくらいかな？

「って、まだ半年くらいしか経ってないですよ。」

と、俺は指摘する。すると、リンドウがサクヤさんに、あっちに行くようにいう。

「あー、サクヤ君。今厳しい規律を叩き込んでいるところだから、あっち行ってなさい。」

「お前に教えてもらつことなんてもう無いがな。」

キツパリ言い切つてやった。

リンドウがオイオイという感じでこつちを見る。

「ふふつ。了解しました。上官殿。」

少しからかうように言つたあと俺に手を振り、サクヤさんは行つてしまった。

「さて、俺たちもいくか。」

と、リンドウがいうので、俺も装甲車に乗り込む。

さてと、これが初任務だな。

- - - - -
贖罪の街

「つて、俺が運転すんのかよ！」

「あー、楽だったわー。サンキューサンキュー。」

ついてから気づいた。なぜ俺が当たり前かのように運転させられているのだ？

普通は年配のやることだろ！

上手いこと流されてしまった。

リンドウが助手席に座ったから、流れで運転席に乗ってしまった。帰りは絶対、こいつに運転させ…

「ここも随分と荒れちまったなあ。」

話変えやがったな。

「さてと、じゃあ、実地演習を始めるぞ…つて、お前、なんだその装備！？何ですでにそんな装備を？！新兵でそれはあり得ねえぞ！」

というわけで、面倒臭いが、経緯を説明する。

「…で、榊のおっさんの実験台的な感じになったわけか。おまえも大変だな」

いや、まあ、ここまで危ないとはいえ、強い物をもらえるとこの

は、生き残る上で有利になるから、ありがたいことこの上ないのだから。

「よし、じゃあ仕切り直すぞ。

これから実地演習を始めるぞ。

命令は三つ！死ぬな、死にそうになったら逃げろ、そんで隠れる！
運がよければ不意をついてぶっ殺せ。…あつ、これじゃ四つか。」

相変わらずの阿保だ。

「いつもの掴み、てやつかな？」

そう俺がいうと、リンドウはこっちを見て

「そういうことは、気づいてても言わねえもんだぞ。」

と笑いながら俺の頭をポンポンと叩き行った。

ミッションスタート地点である、高台から降りると、リンドウは右に進んだ。

そして、曲がり角まで行くと、ふと、立ち止まった。

居たか。

「よう、ユウマ。一人で行けるよな？」

いけるさ。…多分。

「サボりたいだけだろ？」

そういうと、タバコを持ち、
リンドウは笑った。

「ちょっとくらい、サボらせてくれ。見ての通り老体なんだから。」

どこがだ、と思いながら親切にも待っていてくれたオウガテイルに
有無を言わず切りかかる。

流石に一撃では無理。

だが、二撃目でオウガテイルは
倒れこむ。そこに、新型神機ロングブレード特有のインパルスエッ
ジを放つ。

氷刀の爆発型インパルスエッジがオウガテイルの頭を吹き飛ばす。

まあ、難なくこなせたかな。

「終わったぞ。リンドウ。」

「おう。見事だ。流石新型。俺には出来ない芸当をしてくれる。合
計三発か。うっし、じゃあ、アナグラへ帰るぞ。」

それに、適当に伝えて、思い出す。

「おい、リンドウ。帰りはお前が運転しろ。」

リンドウがこっちに振り返り、とてもいやそうな顔をする。

「仕方ない。ここは公平にジャンケンで決めようや。」

そうリンドウが提案する。

結果は…俺が運転する羽目になった。
リンドウ。ジャンケンつええ。

第一部隊討伐班リーダー

三つの命令は四つ（後書き）

ユウマ君の装備はチートですね。

というより、剣撃に賭け過ぎです。

すいません。再生能力がチートですから荒神に攻撃されても平気だから装甲要らないんじゃないかね？

という質問には、まあ、限界があるという事で、無理やりですがw。

では、次回は上田さんがやってきます。

えっ？上田さん知らないの？

有名なのに。

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074y/>

ゴッドイーターバースト ～帝王の逆鱗～

2011年11月13日10時43分発行